

News Letter vol.23

Japanese Society for Dance Research

目次

1. 巻頭言

ごあいさつ

貫成人（専修大学）

2. 第77回大会のご案内

実行委員長：大橋さつき（和光大学）

3. 特別インタビュー

パリ第8大学ダンス学科ジュリー・ペラン教授

「私のダンス研究：3つの軸をめぐる軌跡と展望」

聞き手：越智雄磨（東京都立大学）

4. 世界の舞踊学関連学会・機関の紹介

① Banff Centre for Arts and Creativity

中島那奈子（早稲田大学）

② Laban/Bartenieff Institute of Movement Studies

村越直子（武庫川女子大学）

5. 私にとっての在外研究

① ドイツにおけるモダンダンスと舞踊記譜法をととした実践的研究

佐藤真知子

② P.A.R.T.S. のリサーチサイクルについて

敷地理

6. 国際学会・シンポジウム発表報告

① IFTR2025ケルン大会に参加して

近藤つぐみ（早稲田大学）

② Colloque international et interdisciplinaire L'ARCHIVE : DES SOURCES PRIMAIRES AU

NUMERIQUE

永井玉藻（東京大学）

7. 委員会より

7-1. 学会誌編集委員会・・・海野敏

7-2. 2025年度学会大会・・・大橋さつき

7-3. 例会企画運営委員会・・・塚本順子

7-4. 研究奨励賞選考委員会・・・波照間永子

7-5. HP管理委員会・・・酒向治子

7-6. 学術連合委員会・・・海野敏・寺山由美

7-7. ニュースレター委員会・・・福本まあや

8. 学会事務局より・・・小林直弥

編集後記・奥付

1. 巻頭言

ごあいさつ

第23期舞踊学会会長 貫 成人

昨年12月の理事改選に伴い、第23期の会長を拝命いたしました。理事の先生方、会員の皆様とともに舞踊学会を盛り上げて参りたいと存じます。とりわけ『ニューズレター』に関しましては、あらたに編集委員長に就任いただいた福本まあや先生はじめみなさまに、たいへんな責務を担っていただくことになるかと存じます。よろしくお願い申し上げます。

今年度、『ニューズレター』は第23号を迎えました。2011年、「この時代におけるダンスのチカラ」をテーマにした創刊号が発行されて以来、会員のエッセイやインタビュー、研究紹介などを主な内容とし、当時は年二回の発行でした。2019年第17号を機に年一回の発行となり、国内外の学会動向・学会参加報告、在外研究報告、また、貴重な舞踊関係者へのインタビューなどに内容を一新して今に到っております。歴代の編集長、編集委員のみなさまのご尽力と工夫、また、舞踊学会会員、あるいは、学会外の舞踊関係者のみなさまのご協力により、毎号、舞踊研究や舞踊実践について、最新の情報や知識、時に深奥な洞察が紹介され、会員の皆様の舞踊研究や親交の大きな助けになっているものと存じます。「ウェブ上に展開する、舞踊を研究する人々、舞踊を愛好する人々が交流する場になること」という、当時の古井戸秀夫舞踊学会会長が「創刊の辞」にしたためられた理念は十分、達成されているといえるでしょう。

とはいえ、内外の政治・経済・社会情勢の変動に伴い、舞踊やその研究を取りまく環境、大学のあり方なども大きく変わりつつあります。DX（デジタルトランスフォーメーション）にともなうペーパーレス化、オンラインミーティングなどは舞踊学会の活動にも及んでいること、ご存知の通りです。今後も、舞踊学会の活動について絶えざる見直しが必要でしょう。

そのためにぜひ、会員の皆様のご意見やご感想、ご提案などをお寄せいただければ幸いです。それによりさらにニューズレターがブラッシュアップされ、いっそうみなさまの舞踊研究や実践にお役に立つものになることを祈っております。

2. 第77回大会のご案内

第77回舞踊学会大会のご案内

第77回舞踊学会大会実行委員長 大橋さつき

第77回舞踊学会大会は、2025年12月6日（土）・7日（日）の2日間、和光大学にて開催されます。大会テーマは、「異なる身体の『あいだ』」です。

多様性が求められる現代において、舞踊の「越境」する力への期待が高まっていますが、本大会では、越えるべき「境界」や「壁」という考え方を緩め、私たちの「あいだ」に生じるダンス的な事象を考察することで、共生社会の実現に役立つ知見を深めることを目指します。

大会では、舞踊に関する多様な一般研究発表（口頭発表24件、ポスター発表7件）に加え、特別企画として「基調講演」と「シンポジウム」を実施します。1日目の夕方には、対面での「懇親会」も予定しています。

1日目の基調講演は、行動学者の細馬宏通氏を招き、「ダンスの詩的構造を考える-反復と変異-（仮）」と題してご講演いただきます。人と人が共に生きる場における複数の身体の「あいだ」で起こる事象への理解を深め、舞踊の身体性やコミュニケーションの本質を考えるヒントを得る機会となるでしょう。

2日目のシンポジウムは、「異なる身体の『あいだ』にある舞踊」というタイトルで、森田かずよ氏、南雲麻衣氏、DAIKI氏の3名が、他者と「異なる身体」を持ちながら、誰かとの「あいだ」で生き、踊ってきた体験を語ります。その後、細馬氏を交えた討議に加え、身体の特異性や共生社会の課題について、最首悟氏からもコメントをいただく予定です。

本大会は、参加者の皆様と共に、私たちの誰もがそれぞれに「異なる身体」という存在であることへの気づきを確かなものにし、その「あいだ」で舞踊が今後何を成していくのか、未来に向けて語り合う場となることを願っています。

事前参加登録の締め切りは11月22日（土）です。登録は下記のQRコードよりお早めにお申し込みください。

なお、大会の詳細プログラム、抄録、概要などは学会HPに掲載されます。資源節約のため印刷資料の配付はいたしませんので、ご自身でダウンロードしてご持参ください。皆様のご参加をお待ちしております。

記

1. 日時：2025年（令和7年）12月6日（土）・7日（日）

2. 会場：和光大学（東京都町田市）

3. 内容：

- ・一般研究発表

- ・基調講演

- 「ダンスの詩的構造を考える-反復と変異-」（仮）細馬宏通（早稲田大学教授）

- ・シンポジウム「異なる身体の『あいだ』にある舞踊」

- シンポジスト：森田かずよ（Performance For All People-CONVEY-主宰）／南雲麻衣

- （ダンサー、アーティスト、俳優）／DAIKI（SOCIAL WORKEERZ代表、ダンサー、俳優）／

- 細馬宏通／コメンテーター：最首悟（和光大学名誉教授）

- ・舞踊学会総会



以上

3. 特別インタビュー

パリ第8大学ダンス学科ジュリー・ペラン教授 「私のダンス研究：3つの軸をめぐる軌跡と展望」



聞き手：越智雄磨（東京都立大学）

ジュリー・ペラン

パリ第8大学ダンス学科教授。場所に即した振付や空間性、美学を専門とし、現代ダンスの知の在り方を探究。2007年フルブライト奨学金によりNY大学で研究、2019年にHDR取得。著書に『*Figures de l'attention*』（2012）、共編著『*Composer en danse*』（2019）など

越智：この度は舞踊学会ニューズレターのインタビューをご快諾頂き、ありがとうございます。パリ第8大学で授業を受けさせて頂いて、またその後にあなたが出版された本を拝見したりお話を伺ったりしている中で、あなたの現在の研究は、3つの軸を中心に展開しているように思われます。1つは「ダンスの構成（composition）」、2つ目は「位置づけられた振付（chorégraphie située）」、そして3つめは「振付家／ダンサーによる書物（livres d'artistes chorégraphiques）」についてです。それぞれについてご紹介いただけますか？

ペラン：このように私の研究を紹介する機会をいただきありがとうございます。確かに、現在の私の研究はこの3つの軸のまわりに展開しています。ただし、それぞれの主題は同じように発表されているわけではありません。

たとえば、「ダンスの構成」の研究は、2020年に出版された一冊の著書『*Composer en danse*』（les presses du réel、2025年に再版予定）として結実しました。一方、「振付家／ダンサーによる書物」の研究はまだ公開しているものではなく、主に2017年以降、パリ第8大学のダンス学科での授業のなかで展開しています。この研究は、ダンサーたちが書いたテキストへの考察の延長線上にあります。

「位置づけられた振付」の研究は、2000年代半ばから授業の中で少しずつ発展してきたもので、今では私の「ダンスにおける空間性（spatialité）」に関する研究の主要な軸となっています。このテーマについては、多くの論文を執筆してきましたし、2019年には「位置づけられた振付の研究のための問い（Questions pour une étude de la chorégraphie située）」という題名で研究指導資格（HDR）も提出しています。

また、2006年に提出し、2012年に『傾注の形—ダンスにおける空間性に関する5つの試論（*Figures de l'attention. Cinq essais sur la spatialité en danse*）』（les presses du réel）として出版された博士論文も、空間性というテーマに捧げられたものです。

3. 特別インタビュー

ただし、こちらは純粋に舞台上で展開される作品を対象としており、以下の5作品を分析しています。グザヴィエ・ル・ロワ、イヴォンヌ・レイナー、オルガ・メサ、ボリス・シャルマツ、マース・カニンガムによる作品です。そこでは、舞台空間、振付空間、身体空間という3つの空間の構成が、観客の美的経験にどのような効果を与えるかを考察しました。

実際のところ、これら3つの研究軸のあいだにはつながりや交差点が存在しています。これについては、これから私の研究をより詳しくご紹介していく中で、少しずつ明らかにしていければと思います。

1. 「ダンスの構成」について

『ダンスを構成する：操作と実践のボキャブラリー (*Composer en danse. Un vocabulaire des opérations et des pratiques*)』という本は、スイス・ロマンド舞台芸術高等学校ラ・マンユファクチュールの研究部門責任者であるイヴァンヌ・シャピユイと振付家ミリアム・グルファンクとともに4年間かけて行った研究の成果です。彼女たちは2015年に、現代振付家たちへの調査を行うにあたって、私に同行を依頼してくれました。

この提案は、私にとっていくつかの理由で非常に嬉しいものでした。まず、「構成」という問題系は以前から私の関心の中心にありました。私は1990年代末に観客としてダンスに関わり始め、作品分析に深く魅了されました。作品について書くということは、とりわけ、振付が意味を生成する構造を観察することだったのです。すなわち、あるダンスのスタイルを形づくるミクロな構造と、振付全体を構成するマクロな構造の両方を対象としました。

私はまた、1940～1980年のアメリカのダンス史を専門としており、これについて授業も行っています。2007年には、フルブライト奨学金を得て5ヶ月間ニューヨークに滞在し、さまざまなダンスアーカイブで調査を行いました。この時代は、振付作品の捉え方や舞台上での構成方法が大きく変化した時期であり、その変革はダンスだけでなく全芸術分野に及んでいます。

特にジョン・ケージ、マース・カニンガム、アンナ・ハルプリンは、以下のような新しい構成方法を導入しました：

- ・持続時間を感じさせる構造
- ・舞台のさまざまな要素の集合や身振りを創造するために不確定性を取り入れる
- ・ダンサーがなぜ、どのように動き始めるのかを問い直す
- ・グループを動かす指示やルールを了解させる
- ・観客の注意を惹きつけるものを問い直しながら、その知覚を異なる方向に導く構成などです。

こうした構成に関する実験的手法は、モダンダンスの構造を問い直すものであり、1990年代末のフランスの振付家たちにも大きな影響を与えています。私の観客としての視点は、時間的・空間的な構造を可視化することを通して、「見ることの限界」を探るような作品との出会いのな

3. 特別インタビュー

かで形成されてきました。

第二に、私はこれまでに創作プロセスを観察することにも携わってきました。たとえば1999年には、バレエ・アトランティック・レジーヌ・ショピノの創作現場（『*La Danse du temps*』）で1ヶ月間観察を行いました。また2003年にはオディール・デュボックから招かれ、彼女の代表作『*Projet de la matière*』（1993年）を新しいダンサーたちに伝えるプロセスを1ヶ月以上にわたって観察しました。

この研究は2007年に、書籍『*Projet de la matière - Odile Duboc. Mémoire(s) d'une œuvre chorégraphique*』（フランス国立ダンスセンター／les presses du réel）として出版されました。このようなエスノグラフィックなアプローチは、作品が生成される現場において、その構成を分析する上で私にとって魅力的であり続けています。私自身、幼いころからコンテンポラリーダンスのダンサーであり、構成に関する文化がダンスのレッスンや即興のワークショップという実践の内部でどのように伝承されているのかを、改めて認識しています。

『ダンスを構成する』では、これまでとは違う方法論的アプローチをとりました。それは「証言」を通じたアプローチです。

私たちは共通の質問票を考案し、それをもとに10人の振付家とグループインタビューを行いました。マルコ・ベレッティーニ、ナタリー・コラント、DD・ドルヴィリエ、ミリアム・グルファンク、トマ・アウエール、レミ・エリティエ、ダニエル・リネハン、ローラン・ピショー、ロイック・トゥゼ、シンディ・ヴァン・アッカーです。

これだけ多くのアーティストが集まり、自らの構成方法について議論を交わす機会は稀有なものでした。完成した書籍は、個々のポートレートではなく、「構成に関する語彙（vocabulaire de la composition）」としてまとめられました。全24項目にわたり、それぞれを歴史的な文脈のなかで扱っています。たとえば、組み合わせる（Assembler）、選ぶ（Choisir）、引用する（Citer）、制約（Contrainte）、ドラマトゥルギー（Dramaturgie）、空間（Espace）、不確定性（Indétermination）、音楽（Musique）、スコア（Partition）、タスク（Tâche）、トランジション（Transition）… などです。

この本の目的は、実用的なダンス構成のマニュアルではなく、研究者や観客、そして若手アーティストにとって、「振付を構成するとはどういうことか」を理解し、考えるための思考ツールを提供することにあります。フランス語圏では、このような形式の本はこれまで存在していませんでした。

この本の中には「In situ」という章もあり、ロイック・トゥゼ、レミ・エリティエ、ローラン・ピショーがこのテーマについて深く語っています。この章では、ダンスが行われる場所—劇場（見るための建築・装置）という空間や、劇場以外のさまざまな場—について問いを投げかけています。この問題意識は、まさに私の「位置づけられた振付」に関する研究と響き合うもので

3. 特別インタビュー

す。

越智：「in situ」はラテン語で「その場で」や「本来の場所で」という意味ですね。2012年頃、フランスで劇場以外の場所でのサイト・スペシフィックなパフォーマンス、特定の場所や環境に即して作られた作品に対して「in situ」とよく言われていたことを思い出します。

2. 「位置づけられた振付」について

ペラン：私はこの10年ほど、「ダンス・イン・シチュ (danse in situ)」という表現ではなく、「位置づけられた振付」という言い方を使うようにしています。なぜなら、「in」というラテン語の前置詞には、あたかも場所があらかじめ存在し、その中に振付が挿入されるかのような前提があるからです。

しかし私が関心を持っているのは、むしろある場所を起点として構想されるコンテンポラリー・ダンスの振付プロジェクトです。そこでは、場所、身体の動き（ジェスチャー）、知覚主体（ダンサーや観客）の絡まり合いを考える必要があります。

このような視点は、現象学的な思考や、地理学者オギュスタン・ベルク (Augustin Berque) による「メゾロジー（風土学）」的思考から影響を受けています。これにより、「in」という前提を離れ、振付が環境とともに創造されると考えることが可能になります。それは、ジェスチャー、注意、ある場所のデータの集合との共鳴によって編まれた特異な「場」が立ち現れるという考え方です。つまり、振付はある場の「中に」あるのではなく、ダンスの知を通じて「その場に生きる方法」を提案するのです。

このような「位置づけられた振付」の芸術は、現実接近し、かつ現実を理解し、構築する独自の仕方を展開してきました。ここで、先ほどの1つ目の軸「構成」の話とつながります。つまり、振付家たちは「ダンスのために作られていない」場所、「始まりも終わりもない」場所で、いかに構成しているのかという問いです。

さまざまな芸術プロジェクトを前にして、私は以下のような問いを立てました。

- ・アーティストはその場所とどのように関係を築くのか？
- ・その場所のどのような位相（社会的？物質的？歴史的？）が動かされるのか？
- ・観客の注意をどのように導いているのか？

劇場ではない場で、観客が何に注意を向けるかはバラバラです。観客はどこを見るのか？ダンサーが「場」を消すことなく、自らを現すにはどうしたらいいのか？

私はこれを「注意の構成 (composition de l'attention)」と呼んでいます。それは、ジェスチャーの美学と観客の芸術経験に奉仕するものです。劇場の外で行われるこうしたプロジェクトに取り組む中で、私はそれまでの自分の分析手法に疑問を持つようになりました。これまでのダンス研究は、主に劇場用に作られた作品を対象に、美学的・歴史的分析の方法論を発展さ

3. 特別インタビュー

せてきたからです。しかし、劇場建築それ自体が、歴史的・文化的・政治的・技術的な観点からみても、中立なものとは言えません。劇場建築は、強力な「見る装置 (machine de vision)」としての機能を持ち、西洋の舞台芸術の空間構成や上演様式、観客に向き合う形式、踊りの技法、ドラマトゥルギーやナラティブ構造などの規範を形づくってきました。その装置はあまりにも自然に習慣化され、批評の対象にすらならないことが多いのです。

それに対して「位置づけられた振付」においては、場所や文脈は作品の主題であり素材そのものであり、もはや無視することはできません。

では、ダンス研究者はどんな手段でこれに向き合えばよいのでしょうか？ たとえば建築史家、都市社会学者、植物学者、地理学者が持つような記述のツールを使いこなせないことに、ダンス研究者はある種の落胆を覚えることがあると思います。ダンス研究者は往々にしてこの技能を欠いていますが、ある場所の特徴を正確に言語化し、洞察力を持って掴むための能力というものが確かに存在しますし、必要だと思います。ただし、このような困難に直面してまず思い出すべきなのは、美学的分析が関心を寄せるのは、芸術的な行為が場所をどのように知覚可能なものにし、状況を構築するかという点である、ということです。別の言い方をすれば、美学的分析とは、地理的・社会的・エコロジー的・人類学的調査を行うことではありません。それは、芸術的状況が生み出す美的・感性的経験に専念するものです。

アーティストが事前にある場所のリサーチを行い、知識を得ることがあっても、私たちの美学的分析の役割は、その振付作品が行われている時間の間、その場所に特有の仕方で足を運び、発見することへと導く芸術的状況を明らかにすることにあります。ある場所は、その場所についての特定の知識や体験を、伝え、生み出す振付を媒介として発見されます。したがってまず注意を向けるべきなのは、作品がその場所との関係をどのように示し、その場所を存在させているのかという点なのです。

動きの分析の観点からは、私は、「身振り」がその場所をどのように扱うのか、またはどのように「図像化 (figuration)」をしているのかに注目しています。ここで言う図像化とは、世界を観客に対して立ち現させ、示すための振付的手段全般のことを指します。ダンサーは、世界を存在させる関係性を作り出す作業を行うと同時に、それを他者と共有可能な形に翻訳する作業も行なっています。それは、「位置づけられた振付」を研究する上での、本質的な問いかけを開始するきっかけとなります。何が、このダンスはこの場所のために創られたという感覚を生み出すのか？あるいは逆に、その場所に課されたように見える芸術的な執念は何であり、それはその場所について何を明らかにしているのか。このような問いを通して、私は「場所には正確で絶対的な理解がある」という発想を手放すことを提案したいのです。代わりに、その場所に「住まう habiter」ための特有の方法を作り出すコレオグラフィックな知を追求すべきと考えます。人類学者フィリップ・デスコラの言葉を借りれば、ダンサー達に固有の

3. 特別インタビュー

「世界化 (mondiation)」のプロセスが存在することを示すということが重要です。デスコラのこの用語は、ある主体が、社会化の過程で身体化している感覚-運動的(sensori-moteur)で認知的な枠組みをもとに世界を構成する方法を意味しています。そして、それは私たちの知覚や実践、私たちの直感の枠組みの装置としても機能するものであり、意味あるものとして特定の事物を認識させるメカニズムのことでもあります

(Philippe Descola, *Les formes du visible. Une anthropologie de la figuration*, Paris : Seuil, 2021.)。

越智：ペラン先生の「位置付けられた振付」の研究が、西洋の劇場芸術としてのダンスが持つ規範を相対化しようとするものであることが分かってきました。たとえば日本では田中泯が「場踊り」と称した活動を行っています。あるいは、特定の芸術的意図とともに観客に都市空間の中を移動させるツアー・パフォーマンスなどもあります。そのような芸術を考える上では、ペラン先生の研究の観点はかなり有効なのではないかと思いました。

3. 「振付家／ダンサーによる書物」について

ペラン：私はダンサーによる書物／テキストに、さまざまな理由で関心を持ってきました。まず第一に、それらは過去の作品についての唯一の記録であることがあり、芸術的アプローチを理解するための貴重な資料です。これらのテキストには、実践の理論化の試み、社会的・政治的文脈の提示、振付の問題系を詩的に言語化しようとする意思、アーティスト像の社会的構築などが含まれています。

私は2009年から、ダンス研究において、虚構と真実の混ざり合ったこれらのテキストをどう読むかという認識論的問題に取り組んできました。

最初の研究対象は、ダンサーの自伝 (autobiographies) です。このジャンルはある種のコード化された文学様式であり、そこでダンサーたちは自らの職業についての想像力を動かし、表象しています (イザベル・ロネとの共同教育)。

そして2022年からは、研究者グループ (Joanne Clavel, Capucine Dufour, Axelle Locatelli, Zenaida Marin, Sylviane Pagès et Marion Sage) とともに、「自然 (nature)」という主題に関するテキスト群 (第二のコーパス) をもとに新たな研究を始めました。

この研究では、以下のような問いが扱われます。

- ・ダンスと動物、エコロジー、大地、野生、風景、農業との関係は？
- ・都市中心部を離れた生活様式との関係は？

このプロジェクトは、現代の多くの振付家がエコロジカルな姿勢を打ち出している今、非常に重要な意味を持ちます。これを注釈付きアンソロジーとして出版したいと考えています。

また、劇場外で活動する振付家たちが本の執筆にも取り組む理由にも注目しています。

3. 特別インタビュー

というのも、ランド・アートの作家たちと同様に、彼らの作品はしばしば目に触れることがなく、書物が作品のもう一つの場になるからです。

従って、私は単にダンサーや振付家のテキストにとどまらず、「振付家／ダンサーの本」そのものに関心を寄せるようになりました。そして問います。書物は振付芸術に印づけられた美的経験をどのように提供しうるのか？ 振付芸術は読むという行為をどう変えるのか？ これらの本は、内容だけではなく、その物質性や美学的形式において、どのような経験を読者にもたらすのか？

これらの書籍は非常に多く存在しており、現在私はその分類作業に取り組んでいます。その一つのカテゴリーが「ダンスのためのマニュアル」であり、その中には「構成マニュアル」も含まれます。これは最初にお話しした1つめの軸「構成」の話に再び繋がっていきます！

この研究は、ビジュアル・アートの分野で発展してきた「アーティスト・ブック (livre d'artiste)」というカテゴリーと対話しつつも、それとは一線を画し、振付家たちが書物をどのように一つの作品として作り上げているのか、その特有のあり方を明らかにしたいと考えています。

越智：私自身、振付家やダンサーの自伝的テキスト／書物に魅了されると同時に、扱い方について試行錯誤した経験があり、とても関心があります。また、「自然」に関してはジェローム・ベルやフレデリック・アイ＝トゥアティ等によるエコロジー思想と結びついたパフォーマンス・アーツを想起します。

今回のインタビューでペラン先生の研究の3つの軸とその関わり合いを伺いました。2025年10月に東京都立大学など東京都内で講演会をご予定されていますが、講演会で、より詳しくその研究についてお伺いできることを楽しみにしています（※）。

※ジュリー・ペラン先生は、10月21日に「ダンスを構成する：操作と実践のボキャブラリー」（室伏鴻アーカイブカフェShy）、10月29日に「海辺のコレオグラフィ：陸と海のあわいで踊る身体」（東京都立大学南沢キャンパス）と題した講演を実施されました。

4. 世界の舞踊学関連学会・機関の紹介

①Banff Centre for Arts and Creativity

中島那奈子（早稲田大学）

1. 基本情報

学会名（原語）	Banff Centre for Arts and Creativity 【略名】なし
日本語訳名	バンフセンター・フォー・アーツ・アンド・クリエイティヴィティ
設立年	1933年
場所	カナダ、アルバータ州バンフ
HP	https://www.banffcentre.ca/
趣旨・大会情報等	バンフセンターはカナダを代表する教育文化施設で、様々な芸術、文化、創造性を牽引するグローバル組織となっている。カナダの壮大なロッキー山脈の麓に位置し、すべての人に創造的な可能性を刺激し、芸術、科学、ビジネス、先住民文化、山岳文化における仕事の開発と促進を行う。
ジャーナル	学会誌はないが機関誌の発行あり。
参加方法	アーティストとして滞在制作プログラムに参加するには、作品コンセプトと映像、履歴書を提出し、審査を経て採択の可否が通知される。参加者の滞在費は奨学金が出る場合と、参加者が助成金を申請して支払う場合とがある。

2. バンフセンターのドラマトゥルクとして働いた経験

標高1383mというロッキー山脈の中腹に位置するカナダ西部の街バンフは、国立公園に指定されている。この温泉リゾート地として有名な小さな街が大切にしているのが、バンフセンターである。アルバータ大学の演劇コースから始まったこのバンフセンターは、先住民芸術、ビジュアルアーツ、文学、ダンス、音楽、オペラ、演劇、先住民リーダーシップといった様々なプログラムを年間通して開催している。活動の中心は、アーティストの滞在制作（レジデンス）プログラムと、センター内外の人に向けて敷地内の二つの劇場やコンサートホール、ギャラリーで開催される催しである。

私が2022年からドラマトゥルクとして働いている冬季2週間のダンス滞在制作プログラムには、カナダや米国に加えて、メキシコ、ニュージーランド、ノルウェー、インド、日本のダンスアーティストも参加していた。滞在制作プログラムは創作に没頭できるだけでなく、受け入れ側のディレクターやドラマトゥルクとの対話、敷地内にあるアーカイブやジム、プール・サウナが利用できるだけでなく、バンフの壮大な自然から得るインスピレーションなど、アーティストにとって多くの魅力がある。また、敷地内のレストランでの食事の際には、他分野のアーティストとの交流も行われ、スタジオでのリハーサル以上に創作や思考へのヒントを得るも

4. 世界の舞踊学関連学会・機関の紹介

のだった。バンフセンターのプログラムに採択されれば、更なる助成金獲得や活動の展開が見込めるというアーティスト側の期待も大きかった。私がバンフでの仕事を通して得たものも計り知れない。ドラマトゥルクとして一緒に働いたカルガリー大学教授ピル・ハンセンやRUBBERBANDダンスカンパニーの振付家でドラマトゥルクを務めたヴィクター・キハダには、カナダの現地事情や雪山作法！を教えてもらった。そして、一緒にリハーサルを行った才気あふれるカナダ先住民出身の世界的振付家デイナ・アシェベや、両親から受け継いだギックサン族の舞踊団を率いるマーガレット・グレニアー、英仏二カ国語の手話と音声言語を振付に展開させるカイ・グローバー、才能に恵まれたバレエダンサーのマーク・サンプソンらとの現場があつてこそ、意義深くまた心から楽しいと思える仕事をする事ができた。崇高という言葉しか出ない雪化粧したロッキー山脈や、凍りついたルイーズ湖、ジョンストン溪谷の凍った滝は、極寒の自然環境が作る造形美に胸を打たれるばかりだった。またこのバンフセンターでの仕事は、先住民たちが土地や文化の記憶を受け継ぐ「エルダー」の制度と共に、老いと踊りという私の研究テーマにも新たな光を与えてくれた。

カナダは、名門カナダ国立バレエ団を始めとするバレエだけでなく、コンテンポラリーダンスを牽引するラ・ラ・ラ・ヒューマンステップスやキッドピボットも活躍するダンス大国である。大学のダンス研究やドラマトゥルクの実践プログラム、舞台芸術フェスティバルも充実している。加えて、バンフセンターを筆頭に、先住民やアジア系ラテン系ストリート系ダンスの再評価と、障がいを持つアーティストへの創作サポートや劇場作品への展開を期待する眼差しがあつた。



ピル・ハンセンと登ったバンフ裏山



リハーサルスタジオ

4. 世界の舞踊学関連学会・機関の紹介

このバンフセンターのある地域は、かつて先住民たちに神聖であるため人が住んではいけない土地「ミニルパ」と呼ばれていた。ただ、石油と天然ガスを生み出す土地であったゆえに、バンフは負の記憶も抱えている。ヨーロッパからの移民がカナダを建国するにあたって、先住民を土地から追放しカトリック教会と連携した先住民同化政策を進めた。近年その先住民寄宿学校での悍ましい過去が明るみになった。バンフセンターのあるアルバータ州は、同化政策と寄宿学校問題のため、2022年にローマ教皇が謝罪に訪れたまさにその地である。先住民出身者の多くは、いまでも世代を超えたトラウマや差別に苦しみ、貧困や病気、就職難、ドラッグなどの問題を抱える。想像を超える過去の悲劇を知った人々は、その過ちを償うためのプログラムを各地で始めている。そして、バンフセンターはその中心になっていると言ってもよい。これまでバンフセンターではバレエ中心のプログラムが開催されていたが、先住民出身のバレエ振付家アレハンドロ・ロンシエラが、2022年にダンスプログラムのディレクターに就任したのもその流れと言えよう。2021年には9月30日を「真実と和解の日」としてカナダの祝日にするのが制定された。負の記憶を見つめ和解していこうとする姿勢が、この激動するバンフセンターのプログラム内外からも伺える。

バンフセンターのプログラムの始まりには必ず、参加者を歓迎する集まりが行われる。そこでは、この地域の先住民アーティストが呼ばれ、歌とタバコの煙による儀式によってバンフを訪れた者を迎える。私たちはみな、この土地に迎え入れられた移民（セトラ）にすぎない。いまここで、足を下ろして立っているこの地にどういう歴史があるのか、そして、その歴史がどうダンスする身体に影響を与えるのか、バンフに行くたびに考えさせられる。



凍ったルイーズ湖

4. 世界の舞踊学関連学会・機関の紹介

②ラバン/バーテニエフ・ムーヴメント研究所：
Laban/Bartenieff Institute of Movement Studies

村越直子（武庫川女子大学）

1. 基本情報

学会名（原語）	Laban/Bartenieff Institute of Movement Studies 【略名】 LIMS®
日本語訳名	ラバン／バーテニエフ・ムーヴメント研究所
学会設立年	1978年
事務局（場所）	138 South Oxford St. Suite 2D Brooklyn NY 11217
HP	研究所ホームページ https://labaninstitute.org/ 会員コミュニティページ https://lbms-community.labaninstitute.org/c/start-here/
趣旨・大会情報等	Laban/Bartenieff Institute of Movement Studies（LIMS®）は、ルドルフ・ラバンとアームガード・バーテニエフの動きの理論と実践を保存・発展させるため、研究、教育、芸術文化の各部門を通じて活動する団体。国際的に専門家らをつなぎ、教育・研究・公演・出版などの活動でLBMSの普及と発展を図っている。LIMS®は1978年に「Laban Institute of Movement Studies」として設立され、1981年にバーテニエフの貢献を称えて「Laban/Bartenieff Institute of Movement Studies」に改名された。 【主な活動】 (1)Laban Movement AnalysisおよびBartenieff Fundamentals講習会の開催 (2)研究大会・シンポジウムの開催 (3) <i>The Journal of Laban Bartenieff Movement Studies</i> の発行（査読付学術誌） (4)専門分野別実践・研究グループ活動の推奨 (5)研究資料・文献保存・管理（会員のみアクセス可能）
ジャーナル	<i>The Journal of Laban Bartenieff Movement Studies</i>
入会方法	ウェブサイトより入会可能 https://labaninstitute.org/membership/ 年会費：年間収入によって三段階で設定（The World Bankの基準） ・一般会員 無料 ・正会員 \$130/\$60/\$25 ・60歳+会員 \$65/\$30/\$12 ・学生会員 \$45/\$21/\$9

2. 研究大会（LBMS2025）に参加して

2025年7月18日～20日、LIMS主催のラバン／バーテニエフ・ムーヴメント研究（LBMS）国際学会に参加しました。本大会は、7月14日から開催されていた第34回国際キネトグラフィー・ラバン／ラバノテーション学会（International Council of Kinetography Laban/Labanotation: ICKL）との初の合同開催で、ラバン記譜法とムーヴメント分析の専門家がオハイオ州立大学（OSU）に集い、実践や研究成果を共有しました。両学会に所属するメンバーも多く、多様なアプローチの交流が実現しました。

4. 世界の舞踊学関連学会・機関の紹介

18日には、OSUの名誉教授でダンサーのベベ・ミラー（Bebe Miller）氏による基調講演と両学会幹部によるパネルディスカッションが行われました。パネルでは、各学会の歴史や独自性が紹介されるとともに、「身体」の捉え方や、AI（ChatGPT）やSNSなどの普及による社会変化への対応といった幅広いテーマで議論が交わされました。

大会には、キャロル＝リン・ムーア（Carol-Lynne Moore）氏、カレン・ブラッドリー（Karen Bradley）氏など、LBMS分野の第一線で活躍する研究者・実践者が参加。また、ペギー・ハックニー（Peggy Hackney）氏が米国西海岸で展開したLBMSの一派による認定資格（CLMA）所持者、LIMSと提携するヨーロッパのLBMS研究団体EUROLABの幹部なども参加していました。会期中は研究発表に加え、多様なワークショップ、フィルム上映、ダンスパフォーマンスが行われ、LBMS理論の応用や発展の現状を直接体験できました。特に対面ワークショップでは、経歴や肩書きを問わず参加者と身体を通じて触れ合い、感じ、対話しながら研究実践の知見を分かち合えることが、この学会ならではの魅力だと感じました。

私は、カナダで学んだミツヴァ・テクニクのエクササイズを、橋本有子氏とLBMSを用いて共同分析した研究成果を、60分のワークショップ形式にて発表しました。経験豊富な参加者からのコメントは非常に貴重で、共通言語を通じた討論から新たな発見を共有できたことは大きな喜びでした。特にミツヴァ・テクニクの源泉となっているアレクサンダー・テクニクの教師たちとLBMSの言語を介して議論できたことは、このシステムの役割を実感しました。そして、このように同じ関心分野を持つ研究者・実践者との新たなネットワークも形成でき、高額な学会費（350米ドル）に見合う有意義な経験となりました（写真1参照）。



写真1：筆者ワークショップの様子

私の他にも、日本人研究者が活躍していました。お茶の水女子大学の橋本有子氏は、LBMSを基盤にしたソマティック探求により創作されたダンスフィルム「0 zero」を発表し、またミネソタ州立大学マンケート校で教鞭を取る佐藤侑希奈氏は、ゴムバンドを使用して四肢の動きを可視化する授業実践を報告し会場全体から賞賛を受けていました。それぞれ印象的でした。

4. 世界の舞踊学関連学会・機関の紹介

会場は佐藤氏の母校であり、また故サイモア・クラインマン博士がソマティクス博士課程を創設した場所でもあります。既に博士課程は閉じられていますが、本大会には各世代の同窓生が集まり、活発に交流していました。ソマティクス研究の系譜を「場の力」として感じ取る貴重な機会となりました（写真2参照）。



写真2：佐藤氏発表の様子

そして最終日には、ラバンが提唱した「ムーヴメント・コーラス（Movement Choir）」で大会が締めくくられました。参加者それぞれの身体が生み出す動きからダンスが生まれ、その原初的体験を共有することで、実りあるコミュニティが生まれていくのを実感しました。

LBMS学会は、ダンス分野にとどまらず、幅広い身体表現や教育に関心を持つ方にとって有益な発表やワークショップを提供しています。入会はどなたでも可能ですので、興味のある方はぜひ公式ウェブサイトをご覧ください。



写真3：会場となったオハイオ州立大学



写真4：大会会場前の筆者（右）

5. 私にとっての在外研究

① ドイツにおけるモダンダンスと舞踊記譜法をとおした
実践的研究

佐藤真知子

1. 基本情報

渡 航 先 (都 市 ・ 国 名)	ドイツ・ノルトライン＝ヴェストファーレン州 エッセン市
研究機関	Folkwang 芸術大学大学院 舞踊構成法研究科 運動表記法／分析法専攻
在外期間	2024年10月－2026年9月（予定）
目的	舞踊記譜法をとおした舞踊譜資料研究、舞踊上演実践、舞踊作品創作の探究
研究プログラム	修士課程の学生として在籍
グラント申請方法	特になし

2. 在外研究について

Folkwang 学校（現 Folkwang 芸術大学）は、1927年に音楽、舞踊、スピーチのための学校として設立された。現在は音楽、舞踊、演劇、デザイン、写真等を学ぶことができ、6つのキャンパスにおよそ1,600人の学生が在籍している。設立者のひとり、ドイツ現代舞踊の振付家であるクルト・ヨースであり、ピナ・バウシュもここで学び、教鞭をとったことはよく知られている。

舞踊科は、学内で最も古いエッセン＝ヴェアデンキャンパスにある。校舎は元修道院である。学士課程（4年制）と、修士課程（2年制）をもち、後者は舞踊構成法研究科（解釈、振付、運動表記法／分析法の3領域）および舞踊教授法研究科（クラシックバレエ、モダンダンスの2領域）からなる。学士課程は1学年あたりおよそ11-16人、修士課程では1領域あたりおよそ1-6人が学んでいる。学生はヨーロッパ出身者が多く、ドイツ、イタリア、フランス、ポルトガル、ロシア、ウクライナ等から学びに来ている。一方、南米やアジア出身者は数人である。国公立大学であるため、学費は留学生であっても、基本的にかからない。

わたしは修士課程 舞踊構成法研究科に在籍し、運動表記法／分析法を専攻している。運動をスコアに示す方法はさまざまあるが、ここで主に学ぶのはラバン式舞踊記譜法（キネトグラフィ－・ラバン）である。ルドルフ・フォン・ラバンが考案したこの記譜法については、世界におよそ5校の専門教育機関があり、本学はそのうちのひとつである。なかでもこの学校は、舞踊譜をより実演的な側面から扱っているのが特徴的だ。専門職であるノーテーターを目指すというよりも、譜をつかって空間認知能力や時間感覚をはぐくみつつ、舞踊コンポジションを創作し上演する、あるいは運動の観察力と分析力を高めるという点に重きがおかれている。

5. 私にとっての在外研究

基本的に授業はすべてスタジオでおこなわれ、学部でも1年次から必修科目としてキネトグラフィの授業がある。キネトグラフィの分野は、ヘナー・ドリューズ博士が率いている。彼はエシュコル・ヴァクマン舞踊記譜法や、アバターを使ったコンピュータでの動作分析にも長けている。



エッセン＝ヴェアデンキャンパスの門

授業のようす

現在、留学2年目がちょうど開始したところである。これまでの1年を振り返り、まず驚いたことは授業数が多いことだった。私の経験では、たいてい大学の授業は科目ごとに週1コマだったが、こちらは週3-4コマある。たとえばモダンダンスやバレエといった必修科目は週4コマずつあり、学部生はたいてい午前中に両クラスを受講する。キネトグラフィも週3コマあり、くわえてフロアムーブメント、即興、民俗舞踊、解剖学、音楽学等が週1-2コマずつ設けられている。修士課程のクラスは通常午後から始まるが、学部の授業にも参加できるので、わたしも朝から学部生とともにテクニッククラスを受講している。総じて、技術伸長に重点がおかれている大学であるという印象を強くもつ。

キネトグラフィのクラスに着目すると、学部1年次では履修テーマに応じたシンプルなスコアを用いて、この表記法のしくみを身体で理解する。シンプルなスコアであっても、それを身体で表現するのは簡単なことではない。スコアが示す運動情報と、自身の身体感覚とを結びつけることに重点がおかれる。2年次では、身体を部分的にではなく総合的に扱うことを目指し、より複雑なスコアに挑戦する。半年ごとに1, 2年次合同のレクチャー・パフォーマンスがおこなわれる。わたしの履修した3年次のクラスでは、より自由度の高いコンポジションの創作実験があった。発展的なキネトグラフィの概念を扱いつつ、それを自由に解釈することをおとして、自分なりの動きを生み出す。それらのパーツをコラージュして一つの作品にまとめ、学期末試験の場でパフォーマンス発表がおこなわれた。わたしはこれまでキネトグラフィについて、理論的側面以外はほぼ扱ったことがなかった。実際に身体をつかった解釈に取り

5. 私にとっての在外研究

組むことにより、新たな発見や洞察が多く得られた。

もう一つの留学目的である、モダンダンスに話を移そう。この学校はヨース・レーダーテクニックを基盤としている。このテクニックは、ラバン理論のコンセプトと深いかかわりをもつ。現在この科目を教えているのは、学科長でもあり、ながくピナ・バウシュのタンツテアターで踊ったステファン・ブリンクマン教授である。彼はとくに、自らの師であり、また本校の教師でもあった舞踊家・振付家ジャン・セブロンスタイルを受け継いでいる。

セブロンは、ヨース・レーダーテクニックとチェケッティ・テクニックを融合させたといわれる。表現に富んだ上肢の動きと上体のコントラクション、動きのダイナミクスの調整法などにその特徴があるように思われる。

わたしは昨年度、セブロンに関連する舞踊を、セブロンの直弟子をとおして、また舞踊譜をとおしてという2つの異なる切り口から学ぶ機会に恵まれた。まずはブリンクマンによる学部1年次のモダン・テクニックを通年で履修した。くわえてキネトグラフィーのマスタークラスで、セブロンによる舞踊譜の読解・解釈をおこなった（セブロンはすぐれた舞踊家・振付家・教師であっただけでなく、キネトグラフィーにも精通していた）。さらには、3年次の学生とともに、セブロンの他作品の未完成譜から着想を得た作品創作にも取り組んだ。

ほかにも、本学にゆかりのある振付家の作品を習わせてもらえるという幸運も得た。たとえばヨースの『緑のテーブル』の一節に触れたり、あるいはピナの『春の祭典』の一場面に取り組んだりしながら、期末試験の場において発表する機会にも恵まれた。

このように、この学校が紡いできたダンスのあり方に多方面から触れると、舞踊がかなり組織的におこなわれている、という印象を強くもつ。タテヨコのつながりが広く強固であり、いわばひとつの小文化圏を形成している。わたしも幼少期からながく実演にたずさわってきたが、日本では比較的、個人あるいは小団体でのプライベートな活動が一般的であるように思われる（家元制度と関係があるのだろうか）。日本とドイツ、そのいずれにも、それぞれ固有の特徴があり、舞踊文化の比較研究にたずさわっているようで興味深い。

おすすめポイントと注意点

わたしはこれまで20世紀ヨーロッパのモダンバレエ、モダンダンスを研究対象としてきた。それゆえ、ドイツモダンダンスのコミュニティに参加できていることはとても大きな経験となっている。まさに百聞は一見にしかず、である。

舞踊記譜法については、日本では取り組もうとする人は限られており、なかでもキネトグラフィーを芸術舞踊実践の側面からとらえる傾向はほとんどみられない。正直なところ、本学においてもキネトグラフィーは、そこまで学生を惹きつける魅力的な教科であるという様相を呈してはいない。しかしながら、この学校がはぐくんできたダンス文化に少なからず影響を与え

5. 私にとっての在外研究

ていることは確かである。舞踊記譜法をとおして、ドイツモダンダンスのひとつのあり方の核心に触れようとしている、と強く感じる。

もしこの機関で舞踊記譜法を学ぼうとするならば、最低限の舞踊技術とキネトグラフィーの基礎はもっておいたほうがよい。正直なところ、修士課程の運動表記法／分析法専攻で学ぶ場合は、必ずしも実技能力が要求されなかったり、記譜法の経験がなくても受け入れられたりすることがある。ただし前述のとおり、クラスはほとんどが実技主体ですすめられるため、動きを実践する習慣があることは環境にコミットする上で重要だ。

さらに、キネトグラフィーの座学クラスは、オンラインでおこなわれる修士ゼミのみである。ゼミでは技術的な質問や、自身のプロジェクトの報告や相談ができる。が、キネトグラフィーの体系的な理論習得は、努めて自ら行動しない限りは十分に得られない、と思った方がよいだろう。たとえば学部のキネトグラフィーのクラスに積極的に参加したり、あるいはすすんで資料を解読したりすることなどが必要となる。わたしの場合は、すでにアメリカ式ラバン表記法（ラバノテーション）の経験があり基礎的な知識は有していたので、比較的応用面に焦点をあてて留学生活を送ることができている。

本年度は卒業制作に向けた活動がはじまる。わたしは日本でおこなってきた研究を応用させた創作課題に取り組む予定である。本年度も健康に気をつけて、有意義な留学生活を送りたい。

5. 私にとっての在外研究

② P.A.R.T.S.の研究サイクルについて

敷地理

1. 基本情報

渡航先(都市・国名)	ベルギー・ブリュッセル
研究機関	P.A.R.T.S.
在外期間	2023年—2024年
目的	The Master STUDIOS program／リサーチサイクルへの参加
研究プログラム	The Master STUDIOS program
グラント申請方法	ポーラ美術財団研究員

2. 在外研究について

日本からP.A.R.T.S.の研究サイクルに参加するのは私が初めてだと思うので、ここに簡単に概要を書きたい。P.A.R.T.S.の研究サイクルは2年間フルタイムで行われる修士課程のプログラムである。1次のオーディションが書類をベースに行われる。その後現地で1週間のオーディションが行われる。オーディションだけでも、その内容に丁寧に触れようとするとそれだけで今回の字数をあっという間に超えてしまうので、今回は全体に簡単にふれる形に留める。オーディションにかなりのエネルギーを割いていること、つまりプログラムの参加者を大事に選んでいるのに、好印象を持った。そういうこともあり、インテンシブな身体トレーニングを期待して、フルスカラシップを得ることを条件に参加した。ある種のレジデンスに参加するような感覚で、自身のフリーランスの活動と並行して2年間のプログラムを終えた。他にも参加の動機として、パリのCNDで4ヶ月ほどのレジデンスをしたが、国外からの滞在制作はあくまでも一時的な滞在者であり、ローカルな文脈や活動に入っていくことは極めて困難であると感じたこともある。また多様なアーティストと観客と切磋琢磨する刺激的な環境を求めている私はそのような国外での活動を始めるには、ビザや財政的な側面からも学生の身分で始めることが妥当だと感じた。このプログラムの応募には年齢制限がある。その為参加者が若く、それには賛否両論あるがここではそれについての議論は割愛する。このプログラム自体が正式な教育として学位が授与できるようになってから2サイクル目であり、つまりこのような形態になってからのプログラムとしても若い。P.A.R.T.S.は他の研究機関と比較してビザへの対応が手厚い。というのも様々な国から参加者を集めており、修士課程では全員が異なる国から参加し、その半数が欧州の外から来る。その為に長年のビザ取得の知識が体系化されている。スタジオの設備やその他のサポートにおいても極めて恵まれた環境である。もちろん恵まれた環境が良いアー

5. 私にとっての在外研究

ティスト、面白い作り手を生むという方程式はない。

食事ではローザスと共用のキッチンから毎日ビーガンのマイクロビोटニックの食事が出る。前述したように、P.A.R.T.S.はある面でとても恵まれた特殊な環境を提供している。去年スタジオが増設され、また施設が大きくなったようだ。ローザスというフランダース政府に手厚く支援されたダンスカンパニーがそのカンパニーのダンサーの育成を目的としたプログラムを始めたのが由縁であり、今は数年に一度学部と修士のダンスプログラムを行っている。他のマスターと比較して外とのつながりが少ない。その理由の一つは単純にプログラムが多忙であり、そもそも人数が少ないことにある。ブリュッセルの他の振付を扱う修士の一つであるISACは美大の中の一つの学部として存在し、より年齢層とバックグラウンドが多様で、自主的にオーガナイズされたものが多く、P.A.R.T.S.に比べて自由に扱える時間が多いので自主性がある。フランクフルトの近くにあるギーセンや、ベルリン芸術大学のHZTとも異なるようにP.A.R.T.S.は大学でない。その為、東京芸術大学大学院映像研究科など一般的な大学教育の形を取るものとは異なり、そもそも教授はいない。教授の不在に一つ言えるのは、以前ローザスで活動してダンサーなどが担うメンターを除いて、複数人の作家（教授）がプログラムの参加者の2年間のリサーチに並走するということがない。プロセスの最初から最後までコミットするのはプログラムのコーディネイター1人のみである。しかし1年毎に参加者それぞれに予算がつき、各自でメンターを外部からつけることができる。また2年目は外部から来てワークショップをするゲストアーティストの希望を自分たちで出すことができる。参加したワークショップなどに対して、丁寧なフィードバックを求められる。これにも見られるように、おそらく欧州の教育システムに全般に言えることだが、この意味でプログラムにおける自主性が高い。プログラムの参加者がその文化教育機関に意見することは普通であり、いわゆる生徒が先生に教えて頂きそれをこなして行くような日本のトップダウン的な関係性は必ずしも前提にない。大学の教育を日本の芸術大学で受けた私の経験を顧みると、もちろん個人が自分の創作活動をするのでトップダウン的な教育はあまりないが、そのシステム、構造はトップダウンである。もちろん日本の文化的背景もあるが、誰を呼び、どう学ぶかを決めるのは上に立つ人間であり、参加者の意見が反映され、またそれを主体的に聞こうとするような態度はない。もしかしたらこれはP.A.R.T.S.が独自に主体的に取り組んでいることなのかもしれない。またcode of conductも作り、参加者と研究機関が一緒になりパワーハラスメントや、セクシャルハラスメント、差別にどう向き合っていくかその行動の指針を作る。おそらくこれは欧州では当たり前で、P.A.R.T.S.の対応が先進的なことは全くない。code of conductの規定の修正、アップデートにプログラムの参加者全員の参加が参加することを求められる。多様性の高い環境では当然のことなのだろう。これは自分と相手の身体に対する広い意味での振付を考える上でも重要な議題である。どう教育、プログラムが行われるべきかをそのプログラムを提供する側と

5. 私にとっての在外研究

参加者が椅子を円形に囲み、一緒に議論するのを私は日本で以前見たことがなかったので驚いた。もちろんこの議論は必ずしも上手くはいかない。また個人のコンディショニングとして身体と精神の両方に予算がつく。毎年自分のフィジオセラピーに予算がつく。私は一年目はそれを使う時間もなかったが、2年目はその予算で筋膜のマッサージを受けに行った。そこでその施術者と会い話しそこで色々と学んだ。精神のケアのための予算もある。もちろん両方とも少額だが、年間それぞれ150ユーロほどだった気がする。こちら2年目に少し余裕ができそれで初めて使用した。サイコロジストのセッションを複数回受けた。肉体的なトレーニングが重視され、サイコロジカルなトレーニングがほぼない中で、それは数少ない精神的なトレーニングまたは実践の一つになり得ると感じた。学部のメンバーを含めて二十代前半、あるいはまだギリギリまだ10代の人が世界各地からを参加するこのプログラムは、参加者の多様性、経済的な格差、さまざま脆弱性を考慮して、その上でこのような手厚い環境になっているのだと思う。プログラムはほぼ週5で朝から晩まである。それはサマーインテンシブのワークショップを2年間受け続けるように感じる。プログラムでは、セネガルに5週間やフランスのPAFに行くことも注目するポイントだと言える。またこの研究機関でどのようなプログラムに参加するかはとても大事なことだが、それと同等またはそれ以上に、どこに住み、どの都市でどう生活するのかの方が作品制作にはより強い影響を与えるようにも感じる。スタジオの外の時間が結局は最もスタジオの中での時間に影響する。ブリュッセルという多様性の高い特殊な場所での生活は、そこでのリサーチや創作から切り離すことはできない。

ここまでプログラムの紹介をして、表面的な情報を羅列して書いてきたが、最後に私の個人的な意見を少しだけ書いて結びとしたい。このプログラムは、日本ではあまり見ることないダンス・パフォーマンスをすること、作り手の育成を目的としたプログラムである。そこでは、トリシャ・ブラウンのレパトリーに触れる程度のモーニングクラスはあっても、ローザスのレパトリーなど、フルイブニングの振付を学び踊る様な内容は含まれてはいない。近いものとしては、セネガルでアフリカンダンスを学ぶ数週間のみである。おそらくそう言った振付を学び踊ると言ったような教育は既に経験されてきたものとする前提がある。芸大大学院の畠山直哉教授も同じようなこと言っていたが、コンテンポラリーダンスや現代美術の作り手の教育といった、新しいものを作ることを目指した環境で、作品の作り方を教えることはある意味で不可能である。創作の為の環境を作ることはできるが、作品の作り方を教えることはナンセンスであり、それぞれがそれを独自に見つけ育てていくことが期待される。そう言った意味で日本ではあまり見ない個々人のリサーチをコレクティブで育てて行くようなワークショップや、フィードバックの仕方を学ぶことは興味深かった。ダンスセオリーのワークショップは特にそうだが、抽象的な言語を身体のアイディアに変形すると言った、得た知識やある種のテクニク

5. 私にとっての在外研究

を自分なりに咀嚼して試す時間と環境が重要になる。そこではインテンシブのような詰め込みで色々なものに触れるやり方が必ずしも効果的とは思わなかった。急ぐ必要もたくさんのもに触れる必要もないのかもしれない。それとは反対に、ある意味でスタジオの中で退屈しなければいけない。特定の文脈でのダンサーと振付家の違いは、人に言われたことをやるか、自分で言ったことをやるかだと思う。それにはまず自分の言葉を見つける必要がある。それは赤子が言葉になる前の何かを発声するのを見守る様に、その新しく、貧しい自分の言葉での表現を支え、刺激することがで作り手のプログラムには大事になるのだろう。



敷地理

身体における自己同一性や自己所有の概念を探求するパフォーマンスやインスタレーションを制作している。ASMRの視覚化など、WET (Weird Erotic Tensions: 奇妙な性的緊張) の動きを参照すること多い作品は、私たちの身体について抱く思い込みが、観客の視線によってどのようにコード化されているのか、そしてその眼差しの政治性と暴力性について考察している。2023年ポーラ美術財団研究員。2024年ACYアーティスト・フェロー。

https://linktr.ee/osamu_shikichi

May.2025 Osamu SHIKICHI, *when the eyes link images* (Performances & Exhibition at Space n.n. @Various Others | Munich contemporary art festival 2025 / Munich, Germany)

6. 国際学会・シンポジウム発表報告

① IFTR2025ケルン大会に参加して

近藤つぐみ（早稲田大学演劇博物館助教）

1. 基本情報

学会名（原語）	International Federation for Theatre Research 【略名】 IFTR
日本語訳名	国際演劇学会
設立年	1957年
場所	Cambridge University Press, Cambridge, UK.
HP	https://www.iftr.org/
趣旨・大会情報等	世界中の演劇・パフォーマンス研究者のコミュニケーションと交流を促進することを目的として、1957年に発足。2025年現在、66ヶ国から会員を擁している。毎年国際会議（年次会議）とジャーナル・書籍の出版を活動の軸としており、加えて地域横断会議の開催も促している。年次会議に先立ち、若手研究者を対象とするNew Scholars’ Prizeと、出身国・学位取得国がアフリカ、アジア、南米の若手研究者を対象とする Helsinki Prizeへの論文応募を呼びかけている。受賞者は当該年度の会議への参加費が免除され、旅費等が支給される。2026年の年次会議は“What theatre does”をテーマに掲げ、オーストラリアのメルボルン大学で開催されることが決定している。
ジャーナル	Theatre Research Internationalがケンブリッジ大学出版から年に3回の頻度で刊行されている。2026年1月以降はテイラー&フランシス社から刊行される。論文は原則としてオンラインリポジトリで公開される。また、会員の共同研究を特集した“Themes in Theatre”の書籍シリーズがブリル社から刊行される。
参加方法	ケンブリッジ大学出版のウェブサイト上でIFTR会員登録を行う。推薦者不要。会議参加費はアブストラクトの受理決定後に別途オンラインで支払う。

2. 当該国際学会に参加して

IFTR（International Federation for Theatre Research）は、演劇やダンスをはじめ、あらゆるパフォーマンス・アーツを対象とする大規模な国際学会です。その年次大会は、毎年6月～7月に5日間にわたって開催されます。ドイツのケルン大学で行われた2025年大会は、同地にカーニバルの伝統が根付いていることにちなんで、“Performing Carnival: Ekstasis, Subversion, Metamorphosis”というテーマを掲げていました。IFTRでエントリーできる枠は、General Panel（以下GP）、Working Group（以下WG）、New Scholars Forum（以下NSF）の三種類用意されています。GPは年次テーマに合わせた発表からなるパネル、WGは「音楽劇」「政治的パフォーマンス」等の特定のトピックごとのグループで参加者が互いに研究内容をシェアするもの、そしてNSFは若手研究者のパネルです。私は今回、NSFの枠で発表を行い、ダンスのWGを中心に聴講しました。

6. 国際学会・シンポジウム発表報告

NSFは、テーマごとに3～4人の発表者からなるパネル形式で、発表時間は一人10分、全体でのディスカッションの時間が20～30分設けられます。NSFへの参加は合計3回まで可能で、その後GPやWGへ移行することが推奨されます。私の場合は、2019年大会に続いて今回が二度目のNSFでした。二度の参加を経験して印象に残ったのは、若手研究者の発表であってもキャリアのある研究者の方々が多く足を運んでくださり、質疑応答では積極的に挙手してくださるということです。今回の私の発表は、“(Re)enacting Nijinsky’s *Marriage avec Dieu*? : Coexistence of the Whole Past in John Neumeier’s *Nijinsky* (2000)”と題し、ジョン・ノイマイヤー振付のバレエ《ニジンスキー》におけるリエナクトメント的要素に着目し、「姿態の再現を通して伝説のダンサーの身体的思考の特性を模倣する」という特徴にバレエの新たな展開を見出すものでした。この発表は、“Archiving the Body: Reenactment, and the Politics of Subversion”という近年のパフォーマンス研究のトレンド・ワードに彩られたパネルに入れてもらったことで、関心度の高い研究者や実践者の方々に聴いていただき、充実したディスカッションを経験することができました。

ダンスのWGである“Choreography and Corporeality”には、全部で20名の発表者がいました。それぞれが現在執筆中の書籍の章や構想を発表し、事前に共有される原稿をもとにフィードバックが交わされます。私が聴講した発表だけでも、従来の教科書的なダンス史をフィンランドのダンス教育の現場から書き換える試み（Hanna Järvinen氏）や、黒人のパフォーマンスをバロック的身振りというキーワードから新たに検討するもの（Thomas DeFrantz氏）、中国の文革期に活躍したバレエダンサーの老いた身体によるパフォーマンスの美学をドラマトゥルクの視点から把握するもの（中島那奈子氏）など、研究の対象も手法もきわめて多岐にわたりました。全体として、研究対象となるダンスの、あるいは研究者自身の文化的バックグラウンドの視点に立つ発表が多く、ヨーロッパ中心主義的なダンスの見方が解体されていくさまを目の当たりにするようスリリングな時間でした。

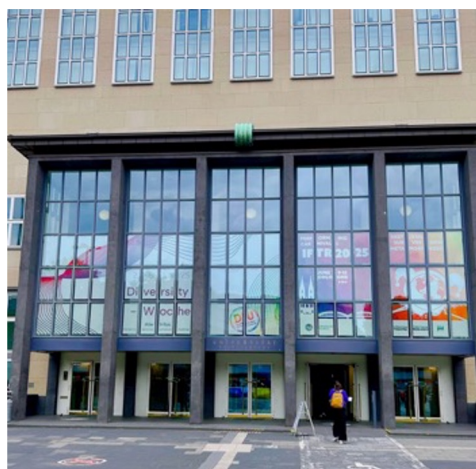


写真1：IFTR2025ケルン大学の風景



写真2：NSFでの発表風景

6. 国際学会・シンポジウム発表報告

さらに今大会で印象的だったのは、パレスチナで今も続くジェノサイドに目を向けたセッションです。大会2日目にはアシュタール劇場の共同創設者Iman Aoun氏、ジェニーンにあるフリーダムシアターのプロデューサーMustafa Sheta氏、同劇場のディレクターで俳優のAhmed Tobasi氏によるアーティスト・トークが大講堂で行われ、また4日目にはジェノサイドへの抵抗がテーマのGPがあり、いずれも会場が熱気に包まれました。折しも私自身、早稲田大学演劇博物館で戦争と演劇がテーマの展示を企画したところだったので、多くのことを考えさせられました。大会最終日にはイスラエルがイランへの爆撃を開始し、このIFTRにもイランの大学からの参加者がいたことを思うと、安易な同情では片付けられない思いを抱きました。

ケルンという街と演劇・舞踊の関係にも少しだけ触れておきます。今回主催校となったケルン大学では、人文学部の中にメディア文化・演劇研究科があります。同研究科が擁する演劇コレクションの図書室は、1955年に市内中心部から離れたヴァーン城内に設置されました。ケルン大学のほかに、市内にはケルン音楽舞踊大学 (Hochschule für Musik und Tanz Köln) という専門大学もあります。そして市内中心部のメディアパークという広場には、ケルン・ドイツダンスアーカイヴ (Deutsches Tanzarchiv Köln) があります。トラムで川を渡った先にはケルン劇場

(Schauspiel Köln) があり、IFTRの期間中にも「アフリコロン (africologne) ・フェスティバル」などの演目が上演されていました。最後に余談ですが、ケルン大学のすぐ近くには大きな人工池のある広々とした公園があり、学生や市民の憩いの場になっています。東アジア美術館と接するその公園の名称は、ヒロシマ・ナガサキ公園。様々な巡り合わせを感じました。

今回、NSFでの発表とダンスのWG等の聴講、そしてケルンという街で過ごした5日間から多くの刺激を得ることができました。この経験を糧に、今後も国際学会発表をコンスタントに続けていきたいと思います。



写真3：ケルン劇場 (Schauspiel Köln) の建物

6. 国際学会・シンポジウム発表報告

② Colloque international et interdisciplinaire
L'ARCHIVE : DES SOURCES PRIMAIRES AU
NUMERIQUE

永井玉藻（東京大学）

1. 基本情報

学会名（原語）	Colloque international et interdisciplinaire L'ARCHIVE : DES SOURCES PRIMAIRES AU NUMERIQUE 【略名】なし
日本語訳名	国際学際シンポジウム「アーカイブ：一次史料からデジタルへ」
学会設立年	2024年
事務局（場所）	フランス、サン＝テティエンヌ大学
HP	https://ihrim.ens-lyon.fr/evenement/colloque-international-et-interdisciplinaire-l-archive-des-sources-primaires-au-2560
趣旨・大会情報等	サン＝テティエンヌ大学の2つの研究所IHRIMとECLA、および研究連携組織GANESHsの共催で行われ、研究者、学芸員、司書、アーキビスト、若手研究者が対象。シンポジウムの目的は、デジタル時代における史料やアーカイブへのアクセスという、現代研究における中心的な課題に取り組むこと。 主要なテーマは ①アーカイブのデジタル構築可能性 ②記憶媒体をめぐる様々な問題 ③アーカイブと権力、アーカイブ化の政治性の3点。
ジャーナル	各発表に基づく論集が出版予定（時期未定）
入会方法	発表者は発表内容の要旨を要領に基づき作成して提出、オーガナイザーの査読を経て採択の可否が決定された。

2. 当該国際学会に参加して

Colloque international et interdisciplinaire L' ARCHIVE : DES SOURCES PRIMAIRES AU NUMERIQUE は、（国際学際シンポジウム「アーカイブ：一次史料からデジタルへ」）は、2024年12月にフランスのサン＝テティエンヌ大学を会場として開催されました。2日間の日程のうち、2日目の午後には修士・博士課程の学生による若手研究発表の時間が設けられました。シンポジウムのオーガナイザーの一人である、文学およびロマンス語圏文明専攻准教授のヴィト・アヴァレッロ先生は、コロナ禍を機に、歴史家としての単独研究から、他分野の研究者との共同研究の重要性を感じたそうです。大学からの予算獲得にも有利だと考え、大学内の技術者や図書館司書、アーキビストを集めてグループを結成。お茶を飲みながら対話を重ねることから始め、共同で何ができるかを話し合った結果、今回のシンポジウム開催につながったとのことでした。デジタルアーカイブの構築は、歴史家だけや技術者だけでできることではなく、一人ひとりの限界を擦り合わせていき、対話することが必要だと強調されていました。

6. 国際学会・シンポジウム発表報告

シンポジウムは両日ともに基調講演から始まり、19世紀の満州におけるキリスト教伝道からナイジェリアの個人所蔵史料のデジタル化プロジェクトまで、デジタルアーカイブに関する多岐にわたるトピックが取り上げられました。私は自身の近年の考察をもとに、バレエのクラスレッスンのデジタル・アーカイブ化の可能性と、その際にアーカイブ化すべき要素についての発表を行いました。舞踊学会の皆さんがご興味を持たれるであろう、舞踊や身体の使い方などに関する発表としては、他に以下の2点がありました。

1日目の午後にオンラインでなされた、オーレリ・ブライエ氏とカトリーヌ・ベランジェ氏による発表では、調理方法の変化とともに失われていくジェスチャーを「文化遺産」と捉え、非物質的なもののアーカイブ化に取り組んでいました。モーションキャプチャーやAI解析を用いて手や体の動きをデータ化し、3Dスタンプをしたり、2Dのアニメーションにしたりするなど、様々なアーカイブ化の手法が示されました。

2日目の若手発表に登壇したエマ・ザルアッティ氏は、「ダンスにおけるレパトリー伝承のためのデジタルアーカイブ」をテーマとしていました。内容は彼女が執筆している修士論文に基づくもので、デジタルアーカイブがダンスの伝承にどのように役立つかを探るのが発表の目的でした。ダンスの継承には、単にステップの順番を把握するだけでなく、動きの背後にある意図や質感なども含まれます。映像はアクセスしやすいけれど、それだけでは作品の全てを再現することは出来ないのも、アーカイブが役に立てることは何か、という発表者の視点が新鮮でした。また、初演時のダンサーなどを「記憶の担い手」としてアーカイブすることや、作品の多様性を認識することの重要性、ドキュメンテーションへのアクセスを促進することについても提案していました。

今回は学会といっても小規模なものだったので、参加者一人一人の距離が近いのが印象的でした。初日の朝、会場に到着すると、オーガナイザーのヴィト先生とエマニュエル・ランボ先生が会場の前で笑顔で出迎えてくださり、緊張がほぐれました。また、1日目の会場はウェルカムカフェも兼ねており、コーヒーを飲みながらリラックスした雰囲気の中で発表を聞くことができました。議論も前向きで建設的なものが多く、実りのある時間となりました。



写真1：2日目の昼食会場となった
サン＝ティエンヌ大学の学食

6. 国際学会・シンポジウム発表報告

自身の研究活動を海外でも行うことについては、研究のテーマや方向性によっても異なる視点があると思います。ただし、例えば学振特別研究員を目指されている方や若手の研究者にとっては、研究費の申請書などで「国際的な研究活動」に言及した方が良さそうな昨今の状況を鑑みると、やはり積極的に海外に出てみるのが良いのではないかと思います。母国語ではない環境で専門的な発表を行うことや、知り合いが全くいない学会に一人で参加することには私も苦手意識がありますが、たとえ質疑に上手に答えられなくても、参加したという事実は変わりません。申請書類に書くネタを1つ手に入れられる、というくらいの軽い気持ちで挑戦しても良いのではないのでしょうか。もちろん、他の研究者と意気投合して国際共同研究に発展することもあるでしょう。留学を目指している方にとっては、指導教員や仲間を見つける機会になるかもしれません。

また、2023年2月に出産した私にとって、今回は産後初の海外学会発表となりました。出発の1週間前にパスポートの期限切れに気がつき、真っ青になって更新手続きをしたり、出発当日に搭乗便がオーバーブッキングのため別便に振り替えさせられそうになったり、経由地のアムステルダムで乗り継ぎの時間が15分しかなく、空港の端から端まで猛然と走ったり、その結果、預け入れ荷物がアムステルダムに置き去りになったりと様々なハプニングにも見舞われましたが、オーガナイザーの先生方のご尽力や、他の参加者の皆さんのあたたかな雰囲気のおかげでいただき、無事に発表を終えることができました。出産後の研究者がいつ頃から海外での学会発表や調査に復帰するかは、本人にとっては大きな課題です。自分がいけない間の育児や家事にはパートナーの協力が不可欠であり、この点については、他分野の同じような境遇の研究者仲間に相談させてもらったりしながら、計画的に準備していきました。子育て世代の研究者にとっては、情報共有ができるだけでもありがたかったので、私もそうした方々のお役に立てる機会があればと思います。



写真2：学会会場となった
教室への案内板

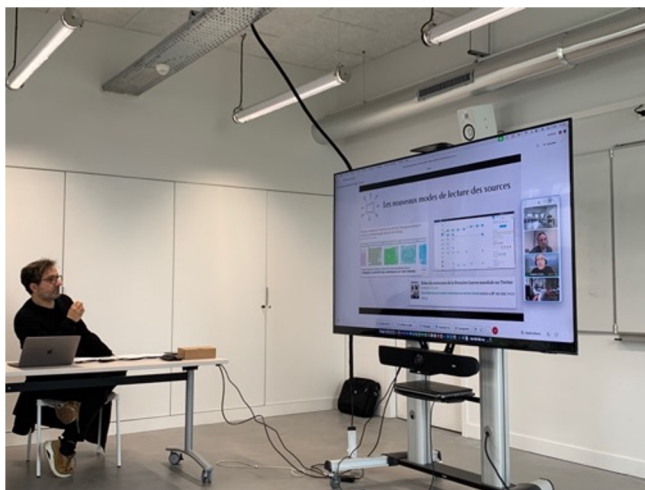


写真3：発表中の様子
(写っている男性が今回のオーガナイザーのヴィト先生)

7. 委員会より

7-1. 学会誌編集委員会…海野敏

学会誌『舞踊學』では、査読を経て受理された投稿論文（投稿規定 <https://danceresearch.jp/buyougaku/kitei.htm>）の他にも、会員の皆様の著作情報が掲載されます（単著、共著、翻訳。ただし舞踊学関連書で、本人から報告のあったもの一人5点以内に限る）。ご著書を出版されました際には、随時メールにて学会誌編集委員会（buyougaku48editorial@gmail.com）までお知らせください。

7-2. 2025年度学会大会…大橋さつき

2025（令和7）年度第77回舞踊学会大会は、2025年12月6日（土）～7日（日）、和光大学（東京都町田市金井ヶ丘5-1-1）において開催いたします。詳細は、学会HPの「大会」のページおよび本ニューズレターの「第77回舞踊学会大会のご案内」をご覧ください。

7-3. 例会企画運営委員会…塚本順子

2025年6月14日（土）にオンラインで開催された第28回定例研究会（例会）は、盛況のうちに終了いたしました。

今回は、まず2023年度研究奨励賞を受賞された町田樹氏による受賞特別講演「異文化交渉としてのコラボレーション—ジョン・カリーとトワイラ・サープの共同作品を手がかりに—」が行われました。その後、貫会長が司会を務め、尼ヶ崎彬氏も交えた座談会を開催し、活発な議論が交わされました。続いて、2つの一般研究発表が行われ、有意義な視点や考察が深まりました。参加登録者数135名と、多くの方にご参加いただき、誠にありがとうございました。

ご発表、ご参加くださった皆様、そしてご協力いただいた関係者の皆様に心より感謝申し上げます。次年度も、研究会のさらなる活性化を目指して検討を進めてまいります。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

7-4. 研究奨励賞選考委員会…貫成人(令和6年度)、波照間永子(令和7年度)

令和5年度奨励賞を町田樹氏（論文「フィギュアスケートと舞踊芸術の文化交渉史：ジョン・カリーによる1970-80年代のコラボレーションの意義」（『舞踊學』第46号）が受賞したことが第76回舞踊学会大会総会において報告され、翌三月、猪崎弥生会長と貫奨励賞選考委員長によって賞状と副賞目録が同氏に授与された。

2024年度の研究奨励賞授賞候補の推薦締切は2025年3月31日であったが、同日までに推薦はなく、また、奨励賞委員からも候補は出なかったため、本年度の研究奨励賞は「該当者なし」となった。

7-5. HP管理委員会…酒向治子

舞踊学会の知と交流を深めるため、皆様からの情報提供をお願いいたします。学会では、会員の皆様の研究活動（シンポジウム、ワークショップ、研究会、展示の開催）や、研究助成の募集など、学術的な価値を持つ情報を広く共有しております。ぜひ、皆様の熱意ある活動を学会員全体で共有させてください。情報をお寄せいただける際は、下記のアドレスまでご連絡をお願いいたします。

【情報送付先】 dance.hp.kanri@gmail.com（舞踊学会HP管理委員会）

※ 情報の確実な配信・公開のため、会員MLでの配信をご希望の場合は当該期日の1週間以上前、学会HPへのアップをご希望の場合は2週間以上前を目安にご連絡ください。

7. 委員会より

7-6. 学術連合委員会

藝術学関連学会連合…海野敏

1. 2024年11月16日（土）、令和6年度第2回委員会が専修大学神田校舎において開催され、翌年の第19回藝術学関連学会連合公開シンポジウムのタイトルと会場その他が決定されました。
2. 2025年5月3日（土）、令和7年度第1回委員会を大阪大学中之島芸術センターにおいて開催しました。同日午後、同センターにおいて第19回公開シンポジウム「芸術と万国博覧会」を開催しました。6人のパネリストそれぞれの発表と全員によるパネルディスカッションを通して、活発な議論が行われました。
3. 2025年6月に国会で採択された「日本学術会議法案」に対して、翌月、藝術学関連学会連合委員有志の連名で次の声明を発表しました。「学問の自由を担保する日本学術会議の独立性を損ない、その存在意義そのものを危うくする内容が含まれているため、とりわけ、芸術と関連する制度、政策に関する研究・提言に支障をきたすことがないように、その運用に当たっては十分慎重を期し、必要な修正がおこなわれるよう要望します。」
4. 2025年9月20日（土）、令和7年度第2回委員会が専修大学神田校舎において開催され、次年度の第20回公開シンポジウムのテーマ「芸術の地政学：芸術／藝能における中心／周縁」（仮）と会場その他が決定しました。

日本スポーツ体育健康科学学術連合…寺山由美

2025年度総会が6月7日にオンラインにて開催されました。出席団体数により総会は成立し、全審議事項が可決されました。

7-7. ニュースレター委員会…福本まあや

ニュースレターは年1回、一般アクセス可能なオンライン発行となっています。舞踊・ダンス及び関連領域の国内外の情報をお届けします。「国際学会発表報告」や「情報コーナー」等に掲載したい情報等がありましたら、毎年5月末頃までにご一報ください。
新アドレス：danceresearch.nl@gmail.com

8. 学会事務局より

その1. 年会費納入のお願い

2025年度会費は8月末までに納入いただきますよう、メールにてお知らせしております。まだお済みでない方は納入をお願いいたします。

・年会費に関するメールが届いていない方がございましたら事務局までご一報ください。
・校費支払いの場合、振込依頼人欄に「大学名」しか記載されない振込が増えております。事務局ではお名前を確認できないので、該当する方は、振り込んだ旨を必ず事務局までメールでお知らせください。

【年会費】7,000 円／年

【送金先】

●銀行振込口座（銀行からの振込）

※ゆうちょ銀行からの振込：

ゆうちょ銀行 記号 10640 番号 17011471

※ゆうちょ銀行以外の銀行からの振込：

口座名：ブヨウガッカイ 店番：0六八（068） 種別：普通 口座番号：1701147

※振込依頼人名に「ご氏名＋納入年度」（例：ブヨウハナコ2025）をご記入ください。

●郵便振込口座（振込用紙を使用する場合：舞踊学会規定の振込用紙はございませんので、郵便局備え付けの払込取扱票をご使用下さい。）

番号：00960-5-154553 口座名：舞踊学会

※郵便振込票の通信欄・ご依頼人欄に必ず「所属機関、氏名、納入年度、電話番号」のご記入をお願い致します。

その2. 登録情報変更申請のお願い

年度が変わる時期などにお引越等で住所が変わり、当学会からの郵便物などが届けられない、所在不明の会員の方が毎年増えております。メールアドレス、住所、勤務先等に変更のある方は、学会HPの「各種事務手続き」から「会員情報の変更申請（会員限定）」のページにて変更後の情報をお寄せ下さい。もしくは、事務局までメールでご連絡下さい。

HP：<https://www.danceresearch.jp/jimu.htm>

事務局メール：office@danceresearch.jp

舞踊学会事務局 小林直弥

編集後記・奥付

ダンスの研究と実践の声が交差する誌面となりました。ご寄稿いただいた皆様、誌面レイアウトと校正を担当してくださった委員の皆様に感謝申し上げます。（越智）

ご多用な中、玉稿をお寄せいただきました寄稿者の皆様に感謝いたします。委員会では主として校正を担当させていただきました。貴重な原稿をいち早く読むことができ、委員の特権を享受させていただきました。初めてのことでゆえ不明な点も多く、こうして無事に刊行できることを大変嬉しく思っています。（柴田）

今回、主に会計業務を担当させていただきました。執筆者の皆様、編集委員の先生方のご尽力に感謝申し上げます。（高野）

舞踊学会NLの編集に初めて関わらせて頂きました。バンフセンターの記事を執筆しましたが、編集では他の編集委員の先生方にお世話になりっぱなしでした。ありがとうございました。会員の皆さまのご活動に加えて、会員以外の研究者やアーティストのリリースについても伺える、情報発信と知的刺激に溢れたNLになっています！（中島）

ご寄稿を快諾いただいた皆さまに感謝いたします。委員の皆さんに助けていただきながら刊行することができました。次号もよろしくお願いいたします。（深澤）

長く暑い夏が渋々去って金木犀の香りの中、銀杏の実を避けながら歩く季節になりました。ニューズレター委員会は前委員長波照間先生にご説明を頂きながら、2025年3月に始動しました。5月には6名の委員全員が超多忙スケジュールの中、第2回会議をオンラインで開催。あっという間に記事候補が定まり、各方面に取材や記事執筆の依頼が行われ、数週間後には読み応えのある記事が仕上がってきました。本ニューズレター23号にご寄稿、ご協力頂きました皆様に感謝いたします。次号に向けての取材や情報提供のご希望の方は、お気軽にニューズレター委員会までご連絡ください。（福本）

ニューズレター第23号

発行者：舞踊学会（会長：貫成人）

発行日：2025年11月1日

編集（姓の五十音順）：

越智雄磨 柴田隆子 高野美和子 中島那奈子

深澤南土実 福本まあや

ご意見、ご感想、掲示板への投稿希望は以下のアドレスまでお願いいたします。

ニューズレター委員会

danceresearch.nl@gmail.com